



ピアノ調律師の中でもひと握りしかないと言われる「コンサートチューナー」を40年以上続ける鈴木均さん(77)は、名古屋などで国内外の一流ピアニストの仕事に任されてきました。これまで出会った名演奏家の舞台裏やピアノ音楽について、独自の視点で語ってもらいます。

(聞き手・南拡大朗)



鍵盤に魔法を

調律師 鈴木均が語る

①

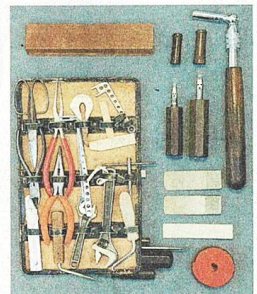
すぎき・ひとし 1947年生まれ、愛知県幸田町出身・在住。同県立岡崎高校卒業後に国立(くにたち)音楽大でピアノ調律を学んだ。音楽文化への長年の貢献が認められ、CBCクラブ文化賞、世界劇場会議名古屋(ITCN)文化賞を受賞した。

家事などで親戚が集まる「なぜ演奏会のたびにピアノを調律する必要があるのか」と時々言われます。家庭用ピアノの調律と同じと思ってしまうのかもしれませんが、コンサートで演奏されるピアノの調律に求められていることは、家庭用とは全く違います。料理に例えるならば、料理人が毎日包丁を研ぐのに似ている。もしコンサート前に調律をしていなかったら「この包丁切れないじゃん」と言われてしまいます。さらに世界トップクラスのピアニストは、スポーツでいうなら1000回を当たり前に10秒切って走るアスリートのような人たちです。9秒80で走るの、9秒79で走るのかが問題になった時、シューズのあれこれが変わるといのがコンサートの調律の世界なのです。

温度や湿度の影響

楽器は温度や湿度の影響を受けやすく、前日に調律したとしても、翌日には弦の張力などいろいろなこ

音のおいしさは 2時間



鈴木均さんがピアノ調律に使う道具の一部。専用の道具もあれば他の仕事で使われているものもある。いずれも愛知県岡崎市シビックセンター

が変化しています。それも大きなピアノになればなるほど変化し、音程などをまずは一回、基本的なところに戻すことから始めます。戻すだけでなく、多少強い力で弾かれても狂わないようにしなくちゃいけない。こっちの方が重要なことで、ただ音程を合わせるだけならそんなに難しくありません。打鍵の強さで、弦を止めているピンがゆるまないようにする、合わせたところから狂われないようにする、というのが調律師としての永遠のテーマかもしれません。

あつんの呼吸で

毎回、調律のために与えられた時間は2時間が目安です。日曜午後3時開演のコンサートでは、午前11時から午後2時まで主催者がリハーサル時間を確保することが多いので、朝9時にはホールに入ります。日本人のアーティストは真面目だから、11時のリハーサル開始より少し前に来ています。外国のピアニストは10時にピアノを弾かないか?とか、12時になっても1時になっても来な

いとか、そのくらい自由な人が多いですね。客席でリハーサルを見てると、だいたいその人がどんな音を出したいのか、どんな表現をしたいのかは分かります。何も言われなくても「こいつしたいんだろつな」っていう、微妙な手直しをするんですよ。外国の人の場合は特に微妙な会話は通訳できないので、それはもう「あうん」というか。「ちょっと待って」「って言うって」「これどう」「って聞いたら「OK、OK」と返ってくる。どちらかというと最初の調律よりもリハーサルを見てから調整の方が大事で、こういう部分に毎回調律をする意味があるのかもしれない。

コンサートが開かれている時間だけ、ピアニストの魔法が解けないようにする。これまでの長い経験から、それこそが調律師の仕事だと考えるようになりました。ピアノの本当に「おいしい」瞬間は本番中の2時間にしかありません。終演してホールのライトが消され、ピアノをピアノ庫に入れると、その日にピアノが弾いた音は翌日にはもう消えているのです。では、いったい具体的に何をしているのか。言葉で説明するのはとても難しいのですが、少しずつ紹介したいと思います。

◇ 次回は20日。以降も、隔週で掲載します。